

座談会

変化するところ、

変化しないところ



木村敏

プロフィール

1931年生まれ。京都大学医学部卒業。名古屋市立大学医学部教授、京都大学医学部教授等を歴任。現在、京都大学名誉教授、河合文化教育研究所主任研究員。精神病理学専攻。禅の思想や西田哲学を精神医学に取り入れ、独自の人間学を提起している。著書に『時間と自己』（中公新書）、「人と人との間」（弘文堂）、「偶然性の精神病理」（岩波書店）、「木村敏著作集」全8巻（弘文堂）他、訳書にピンスワンガー『精神分裂病』1-III（共訳、みすず書房）、同『現象学的人間学』（同）他。シーボルト賞、エグネール賞、和辻哲郎文化賞受賞。



河合俊雄



鎌田東二



畑中千紘

木村 敏 Bin Kimura
(京都大学名誉教授、精神医学)

河合俊雄 Toshio Kawai
(こころの未来研究センター教授)

鎌田東二 Toji Kamata
(こころの未来研究センター教授)

畑中千紘 Chihiro Hatanaka
(こころの未来研究センター特定研究員)

人間存在は「あいだ」こそプライマリーと考える精神医学者・木村敏氏をお招きし、日本語の多義性、日本人の罪悪感の変化、「本末転倒文化」などについて語り合う。

「あいだ」こそプライマリー

河合 「こころの未来研究センター」は、英語で“Kokoro Research Center”と言います。尾池和夫前総長の肝入りで「こころ」という日本語を大切にしているのです。日本語の「こころ」は英語の“mind”なのか“psyche”“spirit”なのか、その意味するところは広い。木村先生はドイツ精神医学から入られましたが、「あいだ」をはじめとして、とても日本語を大切にされていますね。

木村 「あいだ」というのは翻訳不可能ですね。たとえば英語の“between”でもドイツ語の“zwischen”でも、まず2つのものがあって、その中間を指す。二次的なものになっています。私は「あいだ」こそがプライマリーであって、そこからその両側が出てくると考えています。別に2つでなくても、その周りにいくつあっても同じことです。

鎌田 河合隼雄先生の「中空構造論」では、真ん中に「中空」と呼ぶ「あいだ」があって、そこからいろんな第三者が発生してくるという捉え方ですが、その点は共通したところがありますね。和辻哲郎は「あいだ」について、「神聖な無」という言い方をしています。いまだないものが存在する。

木村 私も和辻から教わったのです。元来、中国では「人間」は人と人との間、つまり「世間」という意味です。あるいは、人間として生きている期間という意味です。「人間到る所青山あり」の「人間」ですね。それを奈良時代の日本人が1人ひとりの人という意味に読み違えて理解した。古代から、日本人は人がいるというときには「あいだ」を携えているというか、「あいだ」なしに個人はないということだったのだろうと

思います。そうすると、ますます西洋人に翻訳して伝えるのはむずかしい。

河合 たしかにそうですね。「あいだ」は空間的に理解されやすいが、すごく時間的なところもあります。

木村 いま、時間的と言われましたが、音楽にも「間」があります。武満徹さんと対談したとき、武満さんは「間というのは音と音の間にあるものではない。1音1音の中に間がある」と言われました。そうすると、「人間」についても、1人ひとりの中に「あいだ」があることになる。

鎌田 武満徹さんの『音、沈黙と測りあえるほどに』（新潮社）という本に書かれていますね。その「沈黙」というのが、木村先生の言われる「あいだ」で、プライマリーなものなのでしょうか。

木村 そうだと思います。私は学生時代にピアノを弾いていて、合唱の指揮もやっていたのですが、ある本に、ネコがピアノの鍵盤の上を歩いたときに出る音と、作曲家が作る現代音楽と、どう違うのかということが書いてあって、面白いなと思ったのです。そこで、音楽というのは、音と音をつなぎ合わせる、関係をつける、音と音の間をどう組み立てていくかの関係の芸術だと考えたのです。

私は京大の人文科学研究所の教授をしておられた長廣敏雄先生に音楽を教わったのですが、長廣先生も音と音の関係が大事だと話していました。たとえば、ドレミファソラシドのシの音は、放っておいたら半音上がってドに行く。そういう力をこのシの音は持っている。1つひとつの音がどういう力を持っているか、どういう音を目指すかが大事なのだと言われました。私が精神科の医者になった一番のきっかけはこのあたりかな。1人ひとりがどうこうというより、その「あいだ」がどうだというほうが大事じゃないか。この「あいだ」の研究をしたいという思いが強かったんです。

多義性を持つ「もの」と「こと」

鎌田 医学の主たる領域は、身体という「もの」ですよ。先生はそうではなくて、「こと」とか「あいだ」に興味を持たれたのですね。

木村 「こと」も西洋の言葉では言えないでしょう。「こと」というと「出来事」の意味を取られますが、「出来事」はある意味でもう「もの」なんです。そこでずっと、固定しない、絶えず発生し、生成している状態を「こと」という。それを捉ええなかった。

河合 その意味では、「あいだ」も変わっていく。そのへんが精神医学にとっても心理学にとってもとても大事なことだと思います。

和辻哲郎(撮影:田村茂)



西田幾多郎(提供:石川県西田幾多郎記念哲学館)

木村 西田幾多郎が「主語的論理」と「述語的論理」ということを言っています。文章の主語になれるのは、名詞で言える実体のあるもの、述語は、動詞、助動詞、形容動詞、そういう動きのある言葉を含んでいます。日本語で「何々というもの」「何々ということ」という2つの言い回しがあります。「というもの」に入る「何々」は名詞ですが、「ということ」に入る「何々」は述語的なあり方をしています。「あいだ」は一応名詞として言われるけれども、そのあり方は述語的です。「もの」ではなくて「こと」なのです。

鎌田 日本語では、「もの」自体も「こと」的といえます。私たちは科研で「モノ学・感覚価値研究会」というのをやっていますが、「もの」をいくつかの角度

から分析して、たとえば「もののあはれ」「ものぐるい」「もののけ」「つきもの」「物語」など、いろんな「もの」を考えていくと、「もの」というのは単純に物質ではない。霊的なこととか、目に見えない何ものとか、いろんなものを含んでいて、実に幅広い多義的概念です。

木村 まったくそうですね。

鎌田 ドナルド・キーンさんが『源氏物語』を翻訳するとき、「もののあはれ」を“a sensitivity to things”と訳しました。この things は、「もの」「こと」という意味合いがありますが、英語に訳し切れないスピリチュアルな次元からマテリアルな次元まで含む日本語の「もの」を捉え切れない。「もの」「こと」「こころ」「あいだ」などの概念は、多義性とふくらみを持っていて、日常言語や根源的な存在感覚を言い表すときの想像力と関係しているので、非常に繊細ですが、重要な関係の絆になっているのではないかと思います。

「みんなに申し訳ない」という罪意識

河合 木村先生からご覧になって、日本の「こころ」は変化していますか、それとも変わっていないのでしょうか。

木村 これは絶対に変わらない部分と絶えず変化している部分とがあると思います。そういう意味で二重構造なんじゃないでしょうか。

河合 たとえば「うつ病の文化論」を提唱されていますが、日本人の罪悪感に変化したと思われますか。

木村 これは変化していますね。このごろのうつ病にはほとんど罪の意識が出てこないです。

ドイツに最初に留学したとき、行く前に研究テーマを何にしようかと考えました。ドイツ語の雑誌を読んでいると、うつ病の罪の意識を扱った論文に、罪の意識が一番出やすいのがカトリックで、出にくいのが仏教だと書いてあったのです。あるドイツ人の学者が、世界中のいろいろな地域で比較研究した論文です。そのころ、私は5、6年臨床経験がありましたが、それはすこし違うと思って、「日本人とドイツ人のうつ病患者の罪責体験の比較」を研究テーマにしました。それを書いたドイツ人は、実際自分でいろんな国の患者を診察していないのです。その国の統計とか、あるいはその国の精神科の医者から聞いた話だけで比較しているの、全然信用できない。自分で比較すればまた違って来るだろうと思ったので、ドイツへ行って調べて比較しました。すると、罪責体験の出現頻度は日独でほとんど同じなのです。ただ内容が違っている。ド

イツ人の罪の意識には「神様」が出てきます。あるいは神をいきなり持ち出さなくても、人間としてあるべき姿というものが出てくる。

ところが日本人はそんなものは出てこない。「みんなに申し訳ない」という「みんな」が出てくるのです。それが人と人の「あいだ」ということです。「あいだ」というのは、実は西洋が「神」と言っているものの日本版ではないかと思いました。

その研究をしたのは1960年代ですから、もうほとんど半世紀前のことなのですが、いまでも、たとえば政治家が悪いことをして謝っている姿を見ると、必ず「皆様にご迷惑とご心配をおかけして申し訳ありません」という謝りかたをするでしょう。私は悪い人間だと言って自分を責めはしない。相手のあることとして自分を責める。これはどうやら変わっていない。ただ、罪の意識の出る頻度などは変わってきているかもしれません。

鎌田 とても面白いですね。日本人の、「みんなに対して申し訳ない」という感情は、別の言い方をすると、昔よく言いましたが、「お天道様が見ている」とか、「ご先祖様に申し訳ない」という言い方も通底しますね。

木村 そうです。神さまは天高くおられますから、西洋の罪の意識の持ち方を私は「衛生中継方式」と呼んでいます。一方、日本の場合、超越というのはまず自分の足元へ潜り込んでいく。ご先祖様も地底におられて、草葉の陰に超越者を見出す。その違いでしょうね。

河合 超越というのを天から考える人からすると、日本人には超越とか罪悪感がないように見えてしまうのでしょうか。

木村 だから、ルース・ベネディクトの「罪の文化」と「恥の文化」のように、キリスト教の罪の文化は内面的で、日本人の恥の文化は外面的だという議論が出てくるのですが、それは大間違いだと思うのです。

鎌田 そこがとても興味深いところで、日本人なりの内面性をどう言語化できるかですね。

木村 私は和辻哲郎の影響が強いんだけど、それこそ「風土」ということではないですか。風土が1人ひとりの人間の「こころ」にまで刻印されている。

リングの気持はよくわかる？

鎌田 「こころ」をどこに見るかにかかわるのですが、昭和20年10月の敗戦直後に大ヒットしたサトウハチロー作詞の『リングの唄』に、「リングはなんにもいわないけれど、リングの気持はよくわかる」というフレーズがあります。美学者の高階秀爾氏がフランスでこの唄の話をしたら、リングは単なる果実で、どこに

「気持」があるのかとまったく理解されなかったそうです。でも、日本人にはよくわかった。わかったから大流行した。これは、「こころ」はどこにあるのかと問うとき、人間の内面だけではなく、いろいろなところにあるという捉え方ともつながると思うんです。

木村 そう思いますね。「自然」と「自己」ということなのですが、両方に「自」という共通した文字が入っている。「^{おの}自ずから」と「^{みづか}自ら」が、「自然」と「自己」に対応しています。根源的自発性みたいなものを東洋の人は感じとっている。西洋にも「ナトゥラ・ナトゥランス」（能産的自然）という考え方があるので、共通点はあると思います。

ところが、いまの西洋文明は元来、砂漠で育っているでしょう。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は砂漠の宗教です。自然と言っても日本の自然と全然違って過酷なのですね。日本の自然はモンスーン地帯だから、その懐に抱かれていれば生きていける。あちらの自然は過酷だから、自然と対抗していかなければならないところに西洋文明がある。ここが大きな違いじゃないでしょうか。ユダヤ教やキリスト教などの一神教は、日本の汎神教のように万物に神が宿るといふのは違うのですね。

『となりのトトロ』『千と千尋の神隠し』に読む戦後50年の変化

鎌田 先生のおっしゃる日本の変わらない部分については、私も大変共感します。では、変わる部分はどういうものかといったら、やはり日本の自然も変わってきている。

木村 自然が？

鎌田 はい。最近、日本の大衆文化の中で最もヒットした領域の1つはアニメーションですが、子どもたちに大人気だった宮崎駿監督の『となりのトトロ』というアニメーション映画があります。森の主である樹の精霊がトトロです。ところが、やはり宮崎監督の作品で、2001年に公開されてアカデミー賞を受賞した『千と千尋の神隠し』には、戦後50年経った平成時代の森が出てきますが、そこではもう森がなくなっています。宅地化して人間が住んで、川の主は「腐れ神」と間違われてドロドロに汚染されている。結局、トトロのような澁刺とした自然の神様は消えてしまい、ドロドロの状態になって疲れきっている。それをどうするのかという問題提起が『千と千尋の神隠し』にはあって、戦後50年の中で大きな変化があったことが前提となっています。その変化が身の回りにある。それがこころに、あるいは人間関係にどう反映しているのか、

JASRAC0912091-901

そういう問いがあると思うんです。

先ほどのうつも、自責の念がないということと、垂れ流していく、たとえば、森を切り崩してヘドロが川や海に溜まっていくという事態とパラレルだという感じがします。

木村 自然にも、やっぱり変わっていく部分と変わらない部分があるでしょうね。

河合 それから、われわれが出会うものとしては、罪悪感とか内省というものがない患者さんとかクライエントがものすごく増えてきました。

木村 増えていますね。

鎌田 カウンセリングをやっていて、いつごろからそういう傾向が始まったと感じられますか。

河合 私の感じでは、90年代に解離性同一性障害（1人の人間に複数の人格が現われ、自我の同一性が損なわれる障



『となりのトトロ』(©1988 二馬力・G)
(提供:ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテインメント)



『千と千尋の神隠し』(©2001 二馬力・GNDDTM)
(提供:ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテインメント)

害)がたくさん出てきました。それがまず1つの大きな波です。その後、発達障害といわれる人々がものすごく増えてきました。

木村 解離も発達障害も、私の現役のころにはこれほど表立っていませんでしたから、ここ十数年のことで

河合 そうです。罪悪感と内省って神経症構造ができるためにとって大事な要素なのだけれども、それが

た『千と千尋の神隠し』はまさに解離の世界です。

鎌田 そう言われると非常によくわかる。

木村 私は全然知らないのですが、たとえばどんなことですか。

河合 あの世に行ってしまうと、名前が変わるのです。

鎌田 生のリアリティがない。

河合 解離してしまわないと自然とか神に出会えない。そういうふうにも読めるわけです。

木村 ああ、そうですか。

鎌田 『となりのトトロ』の場合、2人の姉妹はしっかりと大地に根差している。まだ在世感がある。『千と千尋の神隠し』では、自分が半透明になっているというのも象徴的でしたね。自分自身があちら側に行って透明になるので、自分の実体、体の感覚も非常に希薄化してしまう。「カオナシ」という登場人物も、そういう何か得体の知れない不定形な形がうまく表象されていましたね。

河合 そうですね。

インターネットでつながる「あいだ」

畑中 私は心理臨床をやっていますが、本を読むと、うつは怒りとか罪とかと関係があると書いてあるけれども、まだここ数年の経験で、罪の意識がある人に会ったことがないように思います。若い世代の人を中心にお会いしているので、そういう人たちはもう「あいだ」なんてないのかなと思っていたのです。でも、木村先生のおっしゃった、日本人なりの内面性という捉え方は面白いですね。ひよっとすると、インターネットでつながるのも「あいだ」をつくっているのかもしれないと思いました。

木村 それはどうでしょうか。私はメール止まりなのであまり発言する資格はありませんが、面と向かって出会わないと「あいだ」というのは働かないように思います。インターネットで「関係」はできます。でも「関係」と「あいだ」は違いますね。

畑中 ただ、インターネットで日記を書くのは、自分のことを書きたいからというより、みんなから反応をもらうためにやっていますから、同じ趣味の人が集まるのは「あいだ」をつくらうとする動きの1つかなと思います。

鎌田 私も畑中さんの意見に同感するところがあります。インターネットは、不特定多数に開かれているけれども、ある種閉鎖的で濃密な関係性を築く面もある。最近、ミクシィ (mixi) というネット上のバーチャルな共同体があって、そこでのやり取りはとても密になってきています。そういうところで自分なりの存在

意義を感じとっている人もいます。外とは接触を持ってなくても、その中では居場所を持てるという若者もいると思います。

河合 昔なら引きこもって、どんな人間関係も持てていない人が、ネット上では関係を持てたりするわけです。そういう人がネット上の人と実際に会って、いきなり肉体関係を持ったりする。そのへんはカウンセリングをする上で今後の大きな課題です。

鎌田 河合さんは村上春樹の小説などを取り上げながら、現代の若者のこころのありようとかこころの構造を考察する手がかりにしていますね。村上春樹や吉本ばなななど、比較的若い作家の文学作品とか表現の中に、いまの若い人たちのこころを代弁するような部分があると思うんです。村上春樹なんかは特にそういう世代の支持を得ている。それを手がかりにして考察することは、1つの現代文化論として重要です。

河合 そう思いますね。

本末転倒の世界

鎌田 ところで、ブログなどはとくに文体が大事です。テンポやフィーリングに惹かれて読んでいきますから。

河合 実はブログでは内容はあまり大事ではなくて、文体とか、何かと出会っている感覚とか、そちらの方が大事な気がします。

木村 出会っている感覚という？

鎌田 たとえば、キティーちゃんのようなキャラクターやフィギュアを持っていて、それを共有する感覚を通してつながっている。いま、子どもたちは自分1人が変わっているということをしごく恐れます。小学生など、教室の中で変わった行動をしたり、浮いてしまうことをとても恐れていて、それを抑えようという動きがある。そこで、フィギュアによって結ばれているような関係性がさらに強くなるのかなと思います。

畑中 私が面白いと思ったのは、ミクシィのコミュニティで「双子募集」というのがあるのです。双子になりたい人を募集して、自分と同じような人がいたら、その人と実際に会って、同じ格好を試してみる。そして、町に出ていっしょに歩いて楽しむ。

鎌田 その先はどうなるのですか。歩いて、楽しんで。

畑中 ただそれだけです(笑)。もしそこでずれが発見されたらその人とはバイバイで、また新しい双子を募集する。それは内省とはほど遠いというか。

木村 私が自分の文体を大事にするというときは、オリジナリティーを大事にしますが。

河合 いまはそうではないのです。



外務省のカワイイ大使
外務省は日本の若者文化を海外に紹介するために、女優の藤岡静香さん、ミュージシャンの木村優さん、モデルの青木美沙子さんに「ポップカルチャー発信使(通称カワイイ大使)」を委嘱した(2009年2月26日)(提供:時事通信社)

鎌田 私は木村先生の本を読んでオリジナリティーを感じて、人柄とか思想性に共感します。ところが、最近の子はそういうところに着眼しない。そこに独創性を見ないみたいですね。

河合 二次創作がそうですね。ある作品があったら、それをパロディーにして、いかに面白く書き直すか。

畑中 元の作品のキャラクターはそのままだ、自分なりに面白くストーリーを書き直したりするようなことですね。

鎌田 たとえば、『となりのトトロ』だったら、元の物語をベースに、キャラクターはそのまま、シチュエーションとかストーリー展開を作り変えていく。ことによるとポルノにしたり、いろんなものに変えたりする。そういう市場としてコミック・マーケットというのがあるんです。たとえば、木村敏さんなら木村敏さんのオリジナルがあって、そこから自分たちが別の枝葉をつくって、つながっている。

木村 面白いねえ。

鎌田 本末転倒の世界というか。本のオリジナリティーより、末の方が茂っている。

河合 考えてみたら、日本人は昔から本歌取りとか、本末転倒文化みたいなのがありますね(笑)。

木村 それは日本特有の現象ですか。

畑中 欧米にもありますが、日本が一番すごいです。

河合 日本は、アニメをはじめ「オタク」文化を世界中に輸出しているんです。「オタク」はフランス語になっています。

鎌田 “kawaii”という言葉も世界共通語になっていますね。

主語的主体と述語的主体

畑中 実際の「もの」を共有していることがすごく大



今西錦司(撮影:吉田功)

鴨川のユリカモメ(提供:京都フォトライブラリー NET)

事だという気がするのです。「こと」の世界ではなく、具体的な「もの」とかキャラクターを通して、自分たちがつながっていることを確かめているように思います。

河合 言い方を変えると、「こと」への信頼がなくなっているのかなという気もします。

鎌田 罪責感にはネガティブな面もあるけれど、深く自分自身を考え直すことにもつながります。罪責感を持たない場合、自分を振り返るとか、見つめ直すというのはどういうふうになるのでしょうか。

畑中 深まるという感じはまったくないですね。

河合 本来自分のために書く日記をブログで世界に配信していること自体が、もう内と外がひっくり返っている。そうなると心理療法はどうなるのだろう。内面化していかないので、むずかしい。

鎌田 木村先生は、日本人にとっては「あいだ」の方がプライマリーだと言われました。たとえば「音」と「沈黙」であれば、「沈黙」のほうにプライマリーな1つの力というか、リアリティがあった。それが日本の根本的な世界存在感覚だとすると、いまのような非常に表層的なもの、フィギュアやキャラクターでつながっているのは、ベースになるものが失われているということですね。

河合 私の見方では、ヨーロッパは「主語的主体」をつくってきた文化である。「述語的主体」の日本にとって、グローバル化というのはとてもシビアで、主語的主体になれるかという、そうでもない。それで違う形を模索しているのだと思います。

鎌田 浮遊しているような感じです。

木村 要するに、日本では主語的なりアリエーの方がバーチャルなんだ。

鎌田 「主語的主体は偽物っぽい」というような感覚

は、日本人の中にはずっとあったんじゃないでしょうか。

河合 一方で、主語的主体に飽き飽きしている西洋人は、日本文化を面白いと感じる。

鎌田 ある種の西洋文化の病理を担っている人たちは日本文化を面白がる場所があります。しかし、日本人がその先に何があるか見えているわけではないんですね。

鳥の渡りを決めるものは？

河合 ユング派のジェームズ・ヒルマンから聞いたのですが、今日、アメリカではカウンセリングがあらゆる分野に入っていて、潤滑油としてのカウンセラーがいなかったら、もう社会は回らない。だけど、カウンセラーは、昔の精神科医やサイコセラピストが持っていたような、「魂とはなんだろう」という問いを誰も持っていない。いま、むしろそのような原理を問おうとしているのは、問い方はちょっと違うけれど、脳科学者のほうだ。精神医学と心理学の将来はこれからどうなるのだろう、というのです。

木村 大きな問いですね。ここをどう理解するかにもよりますが、私自身が理解する「ところ」は、脳には依存していない。脳を必要としないと思うのです(笑)。たとえば、この研究所の前を流れている鴨川にはユリカモメがたくさん飛んでいるでしょう。渡り鳥は大勢で一斉に遠距離を渡るのですが、ある場所を飛び立って、何千キロか何万キロか離れた目的地まで、いったいどういう申し合わせで渡っていくのかを考えたことがあるのです。動物行動学の人にいろいろ質問を試みましたが、答えが出ていないようです。私の勝手な解釈ですが、渡り鳥の群れ全体が1つの個

体なのだろう。その群れが気象条件などに応じて決心して渡るのではないか。そうすると、その群れには脳はないわけです。1羽1羽には脳があります。渡る目的は繁殖ですから、脳がコントロールして繁殖をする。しかし全体をコントロールしている脳というものはないのじゃないか。

このアイデアは今西錦司さんの「種の主体」という考えからヒントを得ました。ダーウィンの個体単位の進化論ではなく、今西さんの、「種は変わるべき時が来たら変わる」という考え方はすごいと思います。脳は各個体の運動や感覚を制御していますが、最も大事な渡りには、各個体は何も決定権を持っていない。そして、人間もそうじゃないかというわけです。

「あいだ」がプライマリーだと申しましたが、「あいだ」からは単に2人ではなく、場合によっては無数の人間がそこから派生しうるわけです。これは渡り鳥がモデルです。

鎌田 沖縄の八重山諸島には、いつやるか決まっていないお祭りがあります。島の人によると、「波がやってくると始まる」と言うのです。

木村 それはよくわかる。渡り鳥の論理です。

鎌田 波が来ると、群れが決心すると似たような形で祭りの日が決まって、みんなの力がぎゅーっと求心化していく。

木村 そういふものは100年、200年単位の話ではない。今西さんの「種の進化論」だと、種が変わるときは、先駆者もいるし落ちこぼれもいるけれど、全部が変わるといふ。でも一斉に変わるわけではないですよ。これは面白いですね。

鎌田 群れが決心するというのは、西田幾多郎の「場所的論理」と同じですね。

木村 そうです。まさに「場所」が「あいだ」ですから。脳とはまったく無関係です。

鎌田 突然、一遍上人の話になりますが、『一遍上人語録』で大変惹かれたのが、南無阿弥陀仏というのは人間が唱える南無阿弥陀仏じゃなくて、吹く風、立つ波、この森羅万象すべてが南無阿弥陀仏である。そして、人間が極楽往生するというが、そうではなくて、「南無阿弥陀仏が往生する、南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏する」という論理なんです。

木村 そうですね。西田幾多郎も、「物来って我を照らす」という言い方をしています。私が物を見て、物の存在を確認するのではなく、物が私の存在を確認させてくれるという意味です。いまの一遍上人の話も同じだろうと思います。「場所」あるいは「群れ」、「種」と言い直してもいいですね。

河合 そう考えると、本来の心理療法はそういう動き

を取り戻す場所になっていますね。

木村 患者さんと私の「あいだ」というものがそこに実現されればいいわけです。患者さんとのあいだで何かが熟してきているという感覚、妙な感覚ですが、それを持てたら、その人はかなりよくなりますね。

鎌田 熟してきているという感覚は、たぶん群れが決心するというのと同じだと思います。ミクシィの若者の時代も、そういう群れが決心する過渡期なのでしょうか。

木村 ひょっとすると、人類の進化史上で1つの曲がり角にいるのかな。

脳を動かしている「何か」

鎌田 なぜ「群れが飛び立つ」のかは、実際にはまだ解明されていませんね。

木村 動物行動学の人に頑張ってもらわないといけないが、解明はむずかしいでしょうね。個体が動くには、脳が道具として必要ですが、しかし脳を動かしている何かがある、と私は思っているんです。精神科の病気でも、脳が冒されているから、症状が出てくる。脳がその症状を出さざるをえなかった何かがあるわけです。私はその何かが本当の意味での病気だと思うのです。

鎌田 いまの生物学的な精神医学では、遺伝子の解析やドーパミンやノルアドレナリンやセロトニンなどの脳内神経伝達物質がどう作用するかというエビデンスの研究がほとんどで、「脳を動かしている何か」という、より根源的な問いは少ないように思いますね。

木村 誰かが出てくれば変わる。やっぱり人だと思うのです。心理学でも、たとえばフロイトやユングが出てこないと、ことは始まっていなかった。私は精神医学全体がこれからどちらに向かうかということにはあまり関心がない。そのうち誰かが出てくることを期待しています。

河合 先生のいまのご発言は、洗礼者ヨハネみたいですね。その予言の言葉で終わりにしましょうか。今日はどうもありがとうございました。

